

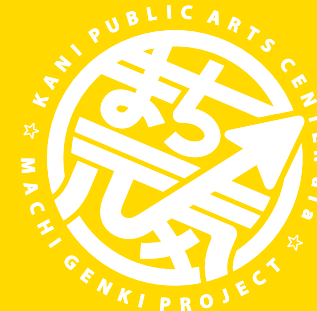


KANI PUBLIC ARTS CENTER ala

MACHI GENKI PROJECT

ala まち元気プロジェクトレポート

2021



<https://www.kpac.or.jp/ala/town/>

KANI PUBLIC ARTS CENTER ala

MACHI GENKI PROJECT

ala まち元気プロジェクトレポート

2021



02. はじめに
03. 私のあしながおじさんプロジェクトにおける新しい取り組み
04. alaまち元気プロジェクト
06. **プロジェクト1** 『みんなでつくる「キミナツ」ムービー』プロジェクト
08. **プロジェクト2** 新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによるおでかけコンサート
09. **プロジェクト3** 文学座おでかけ朗読会「走れメロス」
10. **プロジェクト4** 就学前の子ども達の非認知能力を育むワークショップ「わくどきぐんぐん」
11. **プロジェクト5** 親子de仲間づくりワークショップ
12. **プロジェクト6** 児童・生徒のためのココロとカラダワークショップ スマイリングワークショップ
13. **プロジェクト7** アーラ・イルミネーション
14. **プロジェクト8** 館長のおしゃべりシアター まちが元気になる処方箋
15. **プロジェクト9** 劇場に関わる人のためのアーツマーケティング・ゼミ「あーとま塾 2021 特別編」
16. **プロジェクト10** 森山威男ドラム道場
17. **プロジェクト11** みんなのピアノプロジェクト
18. **プロジェクト12** 多文化共生プロジェクト2021「こころの井戸」
20. **プロジェクト13** エイブル・アート展 **プロジェクト14** アーラ・キネマ倶楽部(福祉施設無料上映会)
21. **プロジェクト15** みんなのディスコ 2021
22. **プロジェクト16** アーラ映画祭 2021
23. **プロジェクト17** ROCK FILL JAM in ala みんなでつくるデザインマスク展
24. **プロジェクト18** 平田オリザの「対話を考える」モデル授業 **プロジェクト19** ココロとカラダの健康ひろば
- プロジェクト20** 劇場フロントスタッフ養成講座
25. **プロジェクト21** alaみんなの同窓会 **プロジェクト22** 歌舞伎とおしゃべりの会
- プロジェクト23** 東日本大震災復興支援 祈りのコンサート
26. ala まち元気そうだん室
28. ala まち元気部

はじめに

アーラのすべての活動が 「まち元気プロジェクト」

2008年度から取り組んでいる「alaまち元気プロジェクト」は、2021年度で14年間も継続しています。全国に数多ある地域の公共劇場の中でも、これほどに多彩で、丁寧に作り込まれた各種のワークショップや講座等の事業を行っている劇場はそんなに多くはないと思っています。このレポートに掲載している事業は、様々な地域にある社会課題を捉えて、その課題に文化芸術の分野からどのように取り組むべきかを、アーラのスタッフが長年に渡って信頼関係を培ってきたアーティスト達と共に知恵を絞って考えながら、オリジナルの発想で企画されたものばかりです。その根底にあるのは、文化芸術の効果で生きづらさを抱えた市民や成長する子ども達に生きる意欲と喜びを感じてもらうことで、このまちの『元気』を創出していくことが大きな目標です。

文学座や新日本フィルハーモニー交響楽団とは、『地域拠点契約』を締結することにより、公演だけではなくワークショップや講座等の事業にもそのメンバーを派遣してもらい質の向上を図っています。また、市内在住の日本を代表するジャズドラマー森山威男さんにも開館前から毎年ジャズライブを開催していただいております。アーラの秋の風物詩となっています。このようにアーラの主催する事業はほとんどが単年度ごとのいわゆる「興行」ではなく、それぞれがそれぞれの『物語』をもって編成されています。

アーラの全ての活動には、文化芸術創造と生涯学習の要素が溶け合っています。私たちはそれらのジャンルにこだわることなく、文化芸術が持つ『人々の心を豊かにする効果』や『人と人をつなぐ効果』を活用して、この地域に住む人々の生活の質の向上に貢献することによりこのまちを好きになってもらい、隣人に対する寛容の気持ちを醸成していきたいと思えます。特にコロナ禍における生活のしづらさを感じている人々が心の安定を取り戻し、さらにはこれからの時代を生きる若者や子ども達に『つながり』の大切さと心地よさを感じてもらいたいと思えます。理想としては、すべての人々に体験してもらえるとよいのですが、現実には、地道な活動が少しずつでも広がっていくことを願っています。

可児市文化創造センター ala
館長 籠橋 義朗

私のあしながおじさんプロジェクトにおける 新しい取り組み



未来を担う中学生・高校生のしなやかな心に、音楽や演劇など舞台芸術の「感動」を有志の皆さんの寄付により届ける「私のあしながおじさんプロジェクト」。2015年度からは、ひとり親などで児童扶養手当や就学援助を受けている家庭に公演チケットをプレゼントする For Family 制度も開始しています。今後は子ども達の居場所づくりや不登校対策などの事業にも活用させていただきます。

あしなが自販機(寄付型自動販売機)

購入金額の20%が寄付される寄付型自販機の市内第1号がアーラ駐車場に登場。

2021年クリスマス・イブの日に、コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社のご厚意により寄付型自動販売機がアーラ駐車場に設置されました。購入金額の20%が寄付されるこの自販機は、今後市内にも設置される予定です。わたしのこの1本が、このまちの子ども達の笑顔に繋がっている、そんな思いやりの気持ちと行動が少しずつ積み重なって、優しさの連鎖が生まれていくことを願っています。

[私のあしながおじさんプロジェクト 2021年度協賛企業]

可児金融協会、可児ライオンズクラブ、株式会社新和建設美濃加茂支店、KYB株式会社、信和工業株式会社、東濃信用金庫、東濃建物管理株式会社、丸茂電機株式会社、丸理印刷株式会社、めぐみの農業協同組合、ヤマハサウンドシステム株式会社、有限会社可児板金工業所、有限会社亀谷電気商会、匿名を希望する個人3件(順不同・敬称略)

MACHI GENKI PROJECT



ala まち元気プロジェクト

アーラの「まち元気プロジェクト」は、2008年から始まりました。「生きづらさ」や「生きにくさ」を感じている人々を、文化芸術の力を活用して精神的にも社会的にも孤立させないという取り組みです。文化芸術には「共創性」という、複数の人間が関わりあって新しい価値＝仲間・コミュニティをつくる力があります。この文化芸術の力で「生きる力」と「コミュニティ」を創出し、社会の健全化を目指します。本プロジェクトは、市民サポーター、NPO、関係施設などたくさんの人の力に支えられています。わたしのココロが元気になって、周りの人のココロも元気にしたい。そんな思いで、この地域の「まち元気」をつなげていきたいと思っています。

多様な市民による
参加型公演

様々なコミュニティ作り
ワークショップ

貧困やひとり親
などの家族に
文化芸術鑑賞機会を

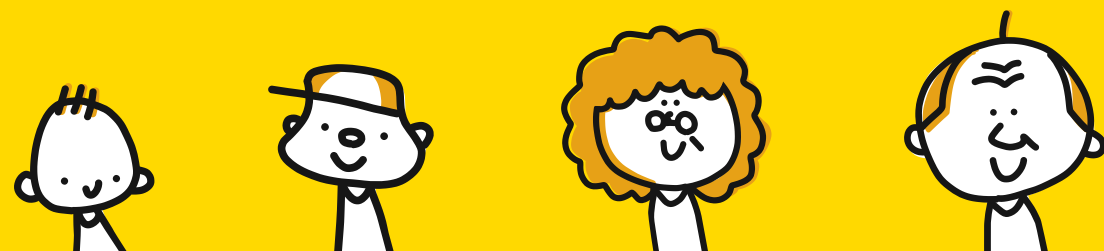
高齢者の仲間づくり
生きがいづくり

子育ての孤立を
防ぐ仲間づくり

学校でのクラス
コミュニケーション

障がいの有無に関わらず、
文化を楽しむ環境づくり

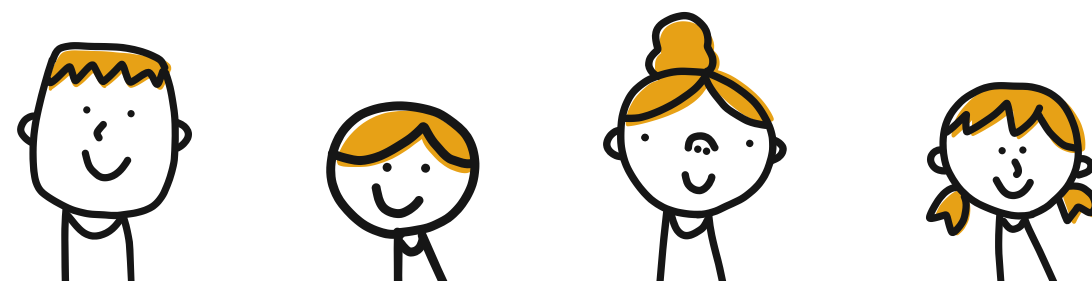
誰もが安心して生活できる
多文化共生社会の実現



劇場と地域が連携して「生きる活力」と「コミュニティ」を生み出します。

連携している地域団体・施設・企業・個人

可児市、可児市教育委員会、市内小中学校、教育研究所・スマイリングルーム、NPO法人alaクルーズ、公益財団法人岐阜県教育文化財団、TASCぎふ、アーラ映画祭実行委員会、ROCK FILL JAM 制作委員会、地域のピアノ講師、NPO法人世界劇場会議名古屋、可児歌舞伎、ママランド、NPO法人可児市国際交流協会（多文化共生センター フレビア）、NPO法人可児市NPO協会（可児市市民公益活動センター Meets）、社会福祉法人可児市社会福祉協議会、岐阜医療科学大学、広眺ヶ丘サロン・三々五々、ハndsオブガッド保育園、株式会社ケーブルテレビ可児、FMラインウェーブ株式会社（順不同）



大型市民ミュージカル「君といた夏～スタンドバイミー可児～」舞台公演代替企画

「みんなでつくる「キミナツ」ムービー」プロジェクト

約100人の市民が参加してオリジナルミュージカルの上演を行う、大型市民参加事業。コロナ禍によって映像製作へ企画変更。



▲ 撮影会参加有志での記念写真



▲ 撮影会での一コマ「空っぽの劇場」でラストシーンの撮影

コロナ禍を越え、新たなつながりを見出す市民参加事業

大型市民ミュージカル『君といた夏～スタンドバイミー可児～』略して「君夏(キミナツ)」は、アーラが実施する大型市民参加事業の1つとして、2011年度に始まりました。下は小学1年生から上は上限なし、100人ほどの出演者全員を毎回市民オーディションで集めています。稽古は秋口から始まり、年をまたいで3月初めの土日に公演を行ってきました。他の2つの大型市民参加事業と年替わりで行われるので、「君夏」はこれまで3回、公演を行っています。本来4回目の公演となるはずだった2021年は、コロナ禍により翌年へ延期。感染拡大の収束が見込めないことから、更にもう1年延期となってしまいました。

可児市を題材とした「君夏」は、過去3回の公演を経て、多くの市民から愛される「わが町の作品」となっていました。役柄によっては年齢制限もあるため、「次はあの役をやりたい!」と意気込む子どもたちも少なからずいます。ただでさえ3年に1回

しかない公演を、更に2年も延期したのでは、やりたかった役をやれなくなってしまうという子もあり、みんなの作品への思いも薄れていってしまうのではないかという危機感を感じました。何かできることは無いかと模索した結果辿り着いたのが、映像製作でした。自分で踊ったり歌ったりした動画を送ってもらい、それを繋いで映像作品を作る形であれば、感染症を気にすることなく、市民参加の事業が出来るだろうと考えたのです。ただ、何分初めての事で、蓋を開けてみれば課題は山積みでした。それをひとつずつ解決しながら、やっと完成に漕ぎ着けたのは、上映会の当日でした。最終的に市民から集まった動画は51名分。稽古も満足に出来ない状況下で、これだけの人たちが頑張って慣れない動画を撮ってくれたことは、本当にスゴイと思いました。また、今回は動画投稿型の映像製作としたことで、舞台公演の形では参加することが出来なかった、今は可児市を離れた過去の出演者が参加できたことが何よりの収穫でした。当時の少年役が立派な青年に成長した姿を見せてくれたり、遠くドイツから歌声を届けてくれた人もいたり。時間や距離を越えたつながりを、強く感じる事が出来ました。

企画を進めながら何よりも感じたことは、この「君夏」という作品は、出演者だけではなく、関わったスタッフ、裏側からサポートしてくださった人達、舞台を観た人たちに至るまで、一人ひとりがとても強い思い入れを持って成り立っているのだということです。この思いを途絶えさせることなく、次へ繋げるために、今回の映像は作られたのだと思います。

3月5日に行われた完成記念上映会での本編上映終了後、ゲストに「君夏」演出の黒田百合さん、振付の神崎由布子さん、歌唱指導の満田恵子さんを迎えてのトークでは、懐かしい過去を振り返ると共に、これからの「君夏」についても熱く語られました。この完成記念上映会は、大事なバトンが次へと渡された日になったのだと思います。



▲ 上映会ロビーでの一コマ パネルに過去の公演資料やのぼり、衣裳、小道具などを飾ってフォトスポットに



▲ 参加有志による自主練会



▲ 上映会後のアフター・トーク

 **YouTube**
動画公開中!!



創作日程	9月～3月(歌唱・ダンス指導用映像製作、稽古・指導)	講師	作・作詞・ナレーション: 瀬戸口 郁
公演日程	上映会 3/5		演出: 黒田百合
会場	ala 主劇場		音楽: 上田 亨
集客数	190人		振付: 神崎由布子
参加者	51人		歌唱指導: 満田恵子
		協力	撮影・編集: 矢島幹也(トイ・ファーム)
			丹羽弘樹、三宅孝秀、(株)ケーブルテレビ可児

新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによる おでかけコンサート

アーラと地域拠点契約を結んでいる新日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーが地域に出向き、クラシック音楽を身近に楽しんでもらうコンサートを開催。



▲ 楽曲の解説をするメンバー



▲ 小学校で演奏するピアノ三重奏のメンバー



▲ 小学校で演奏する弦楽四重奏のメンバー

音楽を通じた心のつながり

今回は5日間の日程のうち、前半3日間を弦楽四重奏、後半の2日間をピアノ三重奏が小学校や中学校、障がい者福祉施設を訪れて演奏を行いました。

小中学校では普段目にすることのないプロの演奏家がクラシックの名曲やポップスなど様々な楽曲を演奏する姿にみなさん興味津々。学校行事が中止となったり音楽の授業で合唱ができなかったりといった状況のなかで、今回のおでかけコンサートを楽しみにしていた児童・生徒もたくさんいたようです。例年では校歌を演奏者の伴奏で歌ったり、楽器の体験コーナーで弦楽器を手に触れてみたりすることができるのですが、コロナ禍でそれができません。それでも、弦楽四重奏と手拍子で共演したり、質問コーナーではたくさんの質問が上がったりと楽団員との交流を深めることができました。

障がい者福祉施設では、知的障がいや身体障がいなどで、普段座ったまま音楽を聴き続けることが難しい皆さんがピアノと弦楽器で奏でられる音楽に熱心に耳を傾けていました。終演後は熱狂的な拍手が数分間続き、急遽アンコールで「ふるさと」が演奏されるなど、思いがけないサプライズがありました。

コロナ禍により様々な制限のあるなかでの開催でしたが、演奏を通じて楽団員と交流ができたことは、参加者にとって貴重な体験になったのではないかと思います。音楽を通じた「つながり」を今後も深めていければと思います。

日	程	11/8～11/12(計12回)
会	場	土田小学校、広見小学校、兼山小学校、今渡北小学校、西可児中学校、障がい福祉サービス事業所 ふれあいの里可児
集	客	556人
出	演	＜弦楽四重奏＞ヴァイオリン：松崎千鶴、田村安紗美 ヴィオラ：高橋正人 チェロ：多田麗王
協	力	＜ピアノ三重奏＞ヴァイオリン：古日山倫世 チェロ：サミュエル・エリクソン ピアノ：高橋ドレミ
		可児市教育委員会

文学座おでかけ朗読会「走れメロス」

文学座俳優が中学校に出向き、教科書に載っている文学作品の朗読を行う。朗読後は生徒の感想を聞くなど交流会を実施。



▲ 朗読に聴き入る生徒たち



▲ 文学座の佐川和正さんによる迫力の朗読

芸術と出会い、人と出会う演劇体験

行く先々の学校で、実際に生徒さんたちに聞いてみたところ、可児市内の中学2年生は、その殆どが「アーラ」を知っていて、行ったことがあるということでした。中には学校や習い事の発表会などで、舞台上に立ったことがあるという子も少なくありません。しかし、アーラで生の舞台を観たことがある子は、あまりいませんでした。そんな子たちが「演劇」という芸術、「俳優」という人間に出会うことができる機会を提供するのが、この「文学座おでかけ朗読会」です。この出会いが彼らの人生の実りをより豊かにするものであるよう祈りながら、おでかけしてまいりました。

今回の朗読作品は、太宰治の『走れメロス』。生徒にとって身近な作品を読んで欲しいという先生からの要望があり、聴き手となる中学2年生の国語の教科書に掲載されているこの作品に決まりました。いきなり「メロスは激怒した」で始まる熱い感情が進るこの作品を朗読してくれたのは、文学座の佐川和正さん。力強く響き渡る佐川さんの声に、生徒たちは作品の世界にグッと引き込まれている様子でした。朗読終了後の質問コーナーでは、初めて生で、間近で触れた、プロの俳優の本気の読みに、驚き、魅了され、興味を持った子どもたちから「どうやったらそんな声が出せるんですか?」「演じ分けがスゴイ!」「これまで聴いた朗読とは全然違いました!」「かっこよかったです!」などなど、俳優さんへの質問や感想をたくさんいただきました。また、先生からは「教室で教科書の朗読CDを聴かせている時とは、生徒の表情が全く違った。正直、こんなに集中して聴いてくれるとは思っていなかった」という感想もいただきました。先生にとっても、子どもたちの新たな一面と出会うことができる機会となっていたようです。

映像技術とともにIT技術が進化・普及し、更にVR、AIも発達してきた現在。コロナ禍も相まって、実演芸術の存在価値、意義が改めて問われています。単純な情報の交換だけでなくデジタル機器等によりサッと済ませてしまえる環境の中で、わざわざ空間と時間を共有して相対することでしか得られない、出会えないものがあります。それに気付くきっかけとして、この朗読が、演劇があれば良いと思います。

日	程	10/19～10/22(計6回)
会	場	中部中学校、広陵中学校、蘇南中学校、東可児中学校
集	客	780人
出	演	佐川和正(文学座)
協	力	可児市教育委員会

就学前の子ども達の非認知能力を育むワークショップ

わくどきぐんぐん

Project 4

子ども達の非認知能力(IQや偏差値のように点数や指標によって明確に認知できるものではない子どもの将来や人生を豊かにする一連の能力のこと)を育む「遊び」の体験づくり。



可児市には県下最大の工業団地が立地しており、人口約10万人のうち外国籍の市民が約7.9%を占めています。言語や文化の違いや両親の就労の事情もあり、子どもたちの成長プロセスにおいて親たちが地域コミュニティとの接点を作り出すことが難しい状況もあることから、保育の時間を通じて、できるだけ早い時期から子どもたちに文化や芸術との出会いを提供できるよう、キックオフとなる2021年度は、可児市内今渡にある認可外保育園「ハndsオブガッド」に通うフィリピンやブラジルからやってきた外国籍の子どもたちを対象にワークショップを年4回に渡って継続的に実施しました。

今回は、2組の講師にファシリテーションを依頼し、絵本の世界や演劇表現の持つ物語性を活かして、子どもたちと大人たちが協力しながら、オリジナルな物語を紡いでいく「楽しさ」や「達成感」、ダンスやコミュニケーションゲームなどを通じて動きをシンクロさせながら、お互いの「信頼感」や一人一人の「自己肯定感」を高めていくことを目指して、子どもたちが主体的に動けるプログラムを進めてきました。

アーラのロフト空間は、彼らの通う保育園の教室よりもずっと広く、時に舞台の照明効果や吊物効果を使用したり、自分たちの身近にあるたくさんの段ボールや手作りの小道具なども使いながら、劇場ならではの創意工夫に満ちた体験が可能なことや、室内空間を一步外に飛び出すと「水と緑の広場」が広がり、鑑賞のために訪れるのではなくても「アーラ」という場所が可児市に住む全ての子どもたちに開かれていることを体感してもらえる機会になりました。

3月26日には2階にあるレセプションホールにて「卒園式」が行われました。4月からいよいよ小学生になる子どもたちのちょっぴりお兄さんお姉さんになった表情が印象的でした。これからもアーラのプログラムにどんどん参加して行ってほしいと願っています。

日程	8/20、11/5、12/3、1/13
会場	ala 美術ロフト ほか
参加者	延べ92人
講師	絹川友梨(俳優、ワークショップファシリテーター)、石丸有里子(俳優/劇団鳥獣戯画)
アシスタント	佐藤律子(NPO法人あそび環境Museumアフタフ・バーバン)、清水洋幸(一般社団法人あそび心BASEアフタフ・バーバン(信州)、ユニコ(俳優・ダンサー/劇団鳥獣戯画)、山田久子(多文化演劇ユニットMICHII)
協力	ハndsオブガッド保育園

親子de仲間づくりワークショップ

Project 5

乳幼児とその親が孤立することを防ぐことを目的に、コミュニケーション・ワークショップを通して、創造力や感受性を育みながら、親子で仲間づくり。



4月からスタートした「親子de仲間づくりワークショップ」。前期はコロナウイルス感染症のまん延により、5月以降の回はほとんど中止となってしまいました。そこで、参加者の皆さんが楽しく交流できる機会を増やすため参加者の皆さんにアンケートをとり、その内容を「ままさん新聞」にまとめ配布しました。新聞を通して、参加者同士の共通点を発見してもらおうと考えたからです。また、アンケートを提出しに来てくれた方にはお子様が喜ぶちょっとしたプレゼントも用意し、気分転換にアーラに遊びにきてもらえるようにしました。

後期は約1年半ぶりに予定していた全回数を実施することができました。やはり、お母さん同士・お子さん同士が同じ空間で一緒に遊ぶことで、「子どもについて新たな発見ができた」「悩みを共有して気持ちがりフレッシュした」などの声が多くあり、対面でのワークショップには沢山の効能があると感じました。加えて、コロナ禍中ということもあり、他人との接触が極端に少なくなっているため、誰かと共に活動することに喜びを感じたという感想を多く聞くことができました。

対面でのワークショップをなかなか実施できずに歯がゆさを感じた前期を経て、人と人がリアルで触れあい、共に活動することの素晴らしさを感じた後期でした。コロナウイルス感染症の影響により窮屈な期間が続きますが、親子が楽しく交流できる方法を模索していきたいです。

<以下アンケートより抜粋>

- ・コロナ禍中に生まれたので人と接する機会が極端に少なくて、やっとこういう交流会に参加でき、親子で楽しめました。
- ・ワークショップを通して子どもの成長を目の当たりにして、子育てはたくさんの人に支えられて成り立っていると改めて思いました。
- ・コロナ禍でもこうして沢山の子供達と触れ合えるチャンスを頂けた事、とても嬉しく思いました。

日程	4/21～12/15(計11回)
会場	ala レセプションホール ほか
参加者	延べ346人
講師	新井英夫(体奏家・ダンスアーティスト)
アシスタント	Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
	板坂記代子、松岡恭子



児童・生徒のためのココロとカラダワークショップ スマイリングワークショップ

市内小中学校の児童・生徒を対象に行うクラス単位のコミュニケーション・ワークショップ。不登校児童・生徒が通うスマイリングルームでのワークショップも実施。



児童・生徒のためのココロとカラダワークショップ 表現の違いを楽しむ

今回は、チーム毎に「3」を表現するというお題。チーム毎に表現を楽しんで、1チームずつ表現の違いを実感。丸っぽい3や、デジタルっぽい3。次のお題のラーメンも「ラーメン」と縦に文字で書いてみたり麺を箸で持ち上げている所だけ表現したり、自分たちが生み出した表現を楽しそうに見せてくれました。

昨年度は全て中止になってしまった本ワークショップ。今年度も1日だけの開催となりましたが、久々に子どもたちと触れ合い、笑顔で楽しんでいる姿をみて、このワークショップの必要性を改めて実感しました。

スマイリングワークショップ 楽器を使ったコミュニケーション

目の前に置かれた楽器をなにげなく鳴らすところからワークショップがゆるやかにスタートしました。新井さんの鍵盤のメロディーに合わせて、うつむいていた子ども目の前の楽器を鳴らし始め、全員で自然に演奏が始まりました。一斉に思い思いに鳴らしていた演奏が、お互いの音を感じながらの曲に変わってきます。演奏が終わった後に、リアクションが小さい子からも拍手がおきました。続いて自分の好きな楽器を選んで演奏。一人ずつ自分の選んだ楽器を鳴らして紹介。また演奏会が始まります。関わっている大人も子どもも関係なく、フラットな関係で音楽を楽しむ時間。

最初は探り探りで、自信がなく音が小さかったり、強く叩きすぎたりしていたのが、ワークを進めていくうちに、音を通じてコミュニケーションが取れていきます。言葉を交わしていなくても、みんな一つのことをした達成感を感じたワークでした。



スマイリング
ルームの先生

それぞれ子どもの様相は違うが、みんな関わりたいという気持ちがある。
「呼応する体験」がこのワークのいいところですね。

今日のワークは大きな音の子だけ目立つのではなく、小さな音が利いてくる。
視線のやりとりや、音を聞き合い、みんなで音楽を奏でていました。



講師

日程	[小中学校] 4/22 [スマイリングルーム] 12/16 ※他日程は感染防止のため中止
実施回数	[小中学校] 4回 [スマイリングルーム] 1回
会場	広見小学校、土田小学校、可児市総合会館
参加者数	[小中学校] 112人 [スマイリングルーム] 8人
講師	新井英夫(体奏家/ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
アシスタント	板坂記代子、松岡恭子、山田久子
主催	可児市
協力	可児市教育委員会

アーラ・イルミネーション

アーラ冬の風物詩! イルミネーション制作、ランプシェードWS、1日1組の点灯式などを実施。



イルミネーションをきっかけに広がる人の輪

噴水まわりのイルミネーションは、NPO法人alaクルーズが制作を行っています。今回は新しい試みとして、中高生ボランティアを募集したところ、6名の学生がイルミネーション制作に参加してくれました。学生の皆さんは、イルミネーションを自分で作るのももちろん初めてでしたが、ベテランのalaクルーズの皆さんのアドバイスを聞き、真剣に取り組みました。また、関連企画「手作りランプを作ろう!」のワークショップにも、8名の高校生ボランティアが参加しました。「子どもと関わりたい」という思いをもった高校生たちは、積極的に子どもたちに話しかけ、alaクルーズの皆さんと声を掛け合いながらテキパキと仕事をこなしてくれました。

そして点灯式初日、「わあ!」という歓声とともに水と緑の広場がきらびやかな光に包まれました。alaクルーズと中高生ボランティアが作り上げたキラキラと輝くイルミネーションを見て、「綺麗だね」「素敵だね」と皆が自然と笑顔に。ワークショップで子どもたちが作ったランプも彩り豊かに輝いていました。きっとあの場所にいた全員が、感動を共有し、あたたかい気持ちになったのではないのでしょうか。

その後、毎晩行われる1日1組限定の点灯式でも可児高校の生徒の皆さんがお手伝いをしてくださいました。点灯ボタンを押すことを楽しみにやってきた子ども達を、高校生達が最高の笑顔で出迎えます。ボタンを押して、広場がパッと光ると、やはりその場にいるみんなが笑顔に。コロナ禍で、みんなで楽しめるイベントが少ない中、このように大切な人思い出を作れるような機会が必要であると強く感じました。

「もっと地域の輪を広げ、多くの人と関わりたい」とalaクルーズ澤野理事長は語っています。まさにその第一歩となったアーラ・イルミネーション。alaクルーズと中高生、中高生と子どもたち、中高生ボランティア同士、今回つながった大きな「輪」が今後どのように広がっていくのか、とても楽しみです。

日程	12/4~1/30(計44回)
会場	ala 水と緑の広場 ほか
参加者	200人
協力	NPO法人alaクルーズ、中高生ボランティア

館長のおしゃべりシアター まちが元気になる処方箋

Project 8

アール館長がゲストと共に文化によるまちづくりについて語り合う公開座談会。



「教育」と「文化芸術」で住み心地のよいまちへ

今回はアールの新旧館長と平田さんお三方で、「アールをつなぐ」をテーマに教育と文化芸術の関わりについて話が膨らみました。

子どもの世代、先の世代にどうい社会を残すのか、そこには教育はもちろん、文化芸術も大きな役割を果たします。人とのつながりの欠如によって様々な問題が起こっている今、未来を担う子ども達がコミュニケーション力を身につけて、人とのつながりを形成していくことを可児市としても教育方針の真ん中に置いています。しかし、コミュニケーション力を育むことは学校だけではできません。コミュニケーション力だけでなく、様々な社会の課題が子ども達に如実に表れ学校におしかかっています。

そこでアールでは、教育研究所と共に子ども達のコミュニケーション力を育むため、平田さんに毎年可児にお越しいただき、先生方へ演劇を活用したコミュニケーション・ワークショップの研修をしています。そのほか学校教育課と連携し、演劇やダンスによるコミュニケーション・ワークショップを多数の学校で実施しています。

平田さんが関わっている兵庫県豊岡市でも、市内36の小中学校全校(小6・中1)でコミュニケーション教育を取り入れ、高校でもほぼ全ての学校で実施しています。平田さんの研修により、教員自身がコミュニケーション授業を子ども達に行っています。2022年度からは非認知スキルの育成を目的に、全校の小学1年生にも導入するそうです。

可児市は10万人、豊岡市は8万人。顔の見えるこの規模だからこそできる手厚い教育、文化芸術によるまちづくりがある。可児市の未来をつくる戦略的な投資として、子ども達のための文化芸術プログラムを、アールは様々なセクターと共同して展開していきたいと思っています。

日	程	7/29
会	場	ala 映像シアター
集	客	数 60人
出	演	者 平田オリザ(劇作家・演出家) 衛紀生(alaシニアアドバイザー兼まち元気そうだん室長) 竜橋義朗(ala 館長)
協	力	可児市教育研究所

劇場に関わる人のためのアーツマーケティング・ゼミ 「あーとま塾2021特別編」

Project 9

劇場や地域の課題に携わる関係者と意見交換し、社会機関としての劇場運営について学び合う。



社会的処方箋活動としての劇場文化

2017年度の開講より今年で5年目を迎えた『あーとま塾』。

本ゼミは<劇場の再定義>をテーマに、劇場法(2013年公布)の考え方に沿って社会機関としての劇場運営の在り方とそのロジックの共有を目指し、劇場や地域社会に関わるさまざまな立場の人たちと意見交換や学び合いを進めてきました。現在、昨年度から続くコロナ禍の影響により、全国にある貸館事業や鑑賞・普及事業を中心に運営を行ってきた多くの公共劇場がその利用に制限を強いられる状況にあり、数々の民間文化芸術活動が先細っており、またその一方で社会全体の「つながりの貧困」や人々の「孤立化」に対応すべく、有志によるコミュニティ再生への市民活動の取り組みが各地に広がっています。

こうした地域社会のニーズの変化に対して、『あーとま塾』では、今年度から<社会的共通資本としての劇場文化>を新たなテーマに据え、行政、NPO(市民活動)、劇場運営者が「誰もとりこぼさない地域社会づくり」という目標を共有し、互いの役割を理解し、協働するためのプラットフォームとして、「地域の劇場」が社会から必要とされている機能を、今後「コレクティブ・インパクト(集合的な価値効果)」という概念からボトムアップで体系化するべきではないかという考えを受講者と共に再確認する機会となりました。

日	程	2/24~25
会	場	ala 美術ロフト、オンライン
参	加	者 25人
基調	レクチャー	オンライン視聴受講24人(※1日目のみ)
事	例	衛 紀生(alaシニアアドバイザー兼まち元気そうだん室長)
報	告	村尾剛志(丸亀市産業文化部文化課市民会館建設準備室長)
		直井 恵(NPO法人アイダオ、NPO法人上田映劇、うえだ子どもシネマクラブ)
		栗田康弘(ala顧客コミュニケーション室長)
ファシリテーター		落合千華(一般社団法人CoAr代表理事、慶応義塾大学政策・メディア研究科SFC上席研究員)

森山威男ドラム道場

可児市在住の日本を代表するジャズドラマー・森山威男氏によるドラム講座。受講生同士で世代を超えて刺激し合い、切磋琢磨。



ドラムを通じて世代を超えた「つながり」の場を

可児市在住の世界的ジャズドラマー・森山威男氏が講師を務める「森山威男ドラム道場」。個人レッスン方式で森山氏から直接学べるとあって、小学生から社会人まで幅広い年代の受講生が毎週レッスンに通っています。レッスンの内容は確実にテクニックが身に付くよう個人のレベルや目的に合わせて考えられた森山氏オリジナルのもの。

はじめに基本的な叩き方から様々なリズムの叩き方で基礎を身に付け、さらに楽譜を使って基本的な演奏パターンを習得。その後、ドラムセットを使っている練習は受講生のレベルに合わせて考えられており、受講生たちは練習を通して、交流を深めながら切磋琢磨しています。

今年度はコロナ禍でレッスンが長期間休講や一部レッスン時間が短縮になってしまうなど異例の事態となりました。そのような状況でも、休講中の9月にはオンラインでの特別講座を開催。森山氏の若い頃の体験談や自宅での練習方法など、普段のドラム道場とは一味違った貴重なお話を聞くことができました。またオンラインの特性を活かし、道場生同士が意見交換するなど、ドラムを通じて世代を超えた「つながり」の場が提供できました。

今年度はドラム道場関連企画として行っている道場ライブが中止となり、当初予定していた曲目を映像収録してオンライン配信とシアター上映会を行いました。例年道場ライブで行っているプロのミュージシャンと道場生とのセッションはできませんでしたが、来年度はセッションを行い、道場生が実践の場として研鑽できる機会を提供できればと思います。

日	程	通年 毎週月曜日(計34回)
会	場	ala 音楽ロフト
参	加	延べ146人
講	師	森山威男

みんなのピアノプロジェクト

「ピアノを弾きたい」という夢や希望を心に抱きながら、家庭環境等の理由でそれを叶えることができない子ども達に、その機会を提供するプロジェクト。付き添いとしてピアノ講師や音大生が入り、見守りながら子ども達の可能性や達成感を育む。



ピアノを通じて自己肯定感を育む

ピアノの技術向上を目的とせず、子どもたちの居場所として機能するように、一人ひとりの気持ちに寄り添って関わってくれている先生たち。自分たちの教室の合間に手伝ってくれる地元のピアノ講師の方や、自身のレッスンの合間に音大生が先生として見守ってくれています。

この曲弾きたい!となかなかハードルの高い曲を選ぶ子にも、「まずはこの曲で練習してからやろうか」と、その子の気持ちを尊重しながら、基礎を身に付けて、弾きたい曲に取り組めるようにしてくれています。

まずは、安心して取り組めるよう、子どもたちの気持ちを受け止めること。そしてできないことを指摘するのではなく、できたことを褒めてあげる。そのことでこの場がその子にとって「自己肯定感」が高まる場になってくれたらと思っています。

ピアノを弾くよりも先生とおしゃべりしている時間が長い子がいたり、レッスン後に書く感想ノートを30分かけて10行びっしりと感じたことを書いてくれる子もいます。この場が居心地のよい場所になっているようです。

『先生から「ぜったい、うまくなれるよ。がんばってね」と言われて本当にうれしかったです。家にかえってもピアノをれんしゅうして、次もがんばります!』(感想ノートより)

ピアノを習ったことがない子が、両手で弾けるようになり、ロビーコンサートをやるまでになったり、また本企画をきっかけにアーラの他の演劇事業にも参加する子も出てきています。大学生の先生のコンサートを名古屋まで観に行ってくれた子もあり、このプロジェクトをきっかけに、子どもたちの世界が広がることを願っています。

日	程	通年 月・木・金の指定日(計220回)
会	場	ala 演劇練習室、美術ロフト
参	加	27人 延べ220人
協	力	ピアノ講師・音大生8人

多文化共生プロジェクト2021「こころの井戸」

異なる言葉や文化を持った人々が、ひとつの舞台作品を創り上げるプロジェクト。2021年度は映像を取り入れた舞台作品「こころの井戸」を制作。



▲「こころの井戸」舞台写真

時間も場所も越えて、多様なルーツを持つ市民と共に創り上げる演劇

多文化共生プロジェクトでは、参加者へのインタビューを元に創作を行う「ドキュメンタリー演劇」を中心に2007年から上演しています。昨年2020年度は、新型コロナウイルスの影響で集まって稽古を行うことができず、オンラインを通じたアニメーション作品の制作を行いました。2021年度はなんとかお客様の前で作品を上演しようと、演出家の鹿目由紀さんと知恵を絞り、舞台に出演する人数を絞った『こころの井戸』という作品を制作しました。

作品の舞台は“井戸”。出演者へZOOMでのインタビューを重ね、聞き取った内容を元に台本を書き上げたオリジナル作品です。「戦争で水の心配をして井戸を掘った」「アマゾンでジャガーに襲われそうになった」それぞれの国での様々な体験、様々な理由で日本に住むことを決めた人々。インタビューでは、井戸を起点にそれぞれの人生が語られ、それが台本に凝縮されました。

出演者は、事前に声を収録して参加する声の参加チーム27名と、舞台に出演する8名の合計35名。ブラジル、日本、フィリピン、インドネシア、タイ、スリランカ、イラク、ペルー、トルコにルーツのある方が参加しました。さらに、アドバイザーチームの住吉さんのお母さん（日本からのブラジル移民第一世代）もブラジルからZOOMで参加していただきました。日本の夜8時はブラジルの朝8時。地球の反対側の一日の始まりを感じながらインタビューができたのは、オンラインならではの感動でした。

そして、今回も立ちちはだかったのは、新型コロナウイルスの壁。まん延防止等重点措置の発令を受け、大部分の稽古が中止となり、出演チームがアールで稽古ができるようになったのは、本番の3週間前。残りの稽古回数が5回という厳しいタイミングでした。様々な言語が入り交じる作品のため、セリフの順番を覚えるだけでもかなり大変です。そんな中でも、

参加メンバーは、良い作品を作ろうとセリフや立ち位置のアイデアを出し、積極的に作品に関わりました。

そんな努力が実り、セリフが繋がり、本番を迎えることができました。稽古中、鹿目さんは「大丈夫」「OK!」と、常に参加者やスタッフを励ましてくれましたが、公演後には「稽古日数が少なくヒヤヒヤした」と本音がこぼれました。

今回、声の出演チームは集まることができず、公演を終えた後はすぐに解散。コロナさえなければ・・・という寂しい思いはありましたが、制約がある中でも無事に公演ができ、拍手の中で幕を閉じることが出来たことは、それ以上の喜びでした。



▲ みんなで小道具のお花づくり



▲ 公演後の集合写真

『多文化共生プロジェクト』を一過性のイベントで終わらせないよう、「こころの井戸」公演後も参加者同士の交流を絶やさぬように、交流会やイベントを開催しました。

ママランド×アールクリスマスプロジェクト

家族で参加できるアトラクション型のクリスマス会を開催。

日程：12/13 会場：ala美術ロフト



うちのお隣さんは外国人『ユーは何しに日本へ?』

地域に暮らす外国人と知り合うオンライン・トークイベント。

日程：3/20 会場：オンライン



創作日程	6/19～7/31(計8回)
公演日	8/1(計2回)
会場	ala 演劇ロフト
集客数	92人
参加者	舞台出演8人、声のみの出演27人(外国にルーツを持つ人、日本人)
講師	脚本・演出：鹿目由紀
協力	アドバイザー：住吉エリオ、村上ヴァネッサ、山田久子 NPO法人可児市国際交流協会

エイブル・アート展 ～彼方の風景～

障がいのある人たちが「生」の証として生み出した作品を「可能性の芸術」として紹介する展覧会。



▲展示の様子



▲関連企画の様子



多様性は人生のスパイスである

今年で13回目となる「エイブル・アート展」。作家らによるありのままの表現は強烈な個性で、人々の物差しを「ぐにゃ」と押し曲げるような不思議な力強さがあります。多様性のある社会が如何に楽しく豊かなものか、理屈抜きで表現しています。それこそが「可能性の芸術」だと感じます。

同時期に開催した、誰もが自由に表現活動ができる『みんなのオープン・アトリエ』企画では、小さな子ども達や障がいのある方々が中心に参加しました。企画実施したTASCぎふのスタッフさんは言います。「社会は変化を求めようとする。でも、変化を求めず、ありのままを受け入れる場があってもいいのではないか。」参加者が自由に思い思いに描いている姿を見ると、その言葉が胸に沁みてきます。何かを表現することは、他者の目に晒され、恐れや勇気を伴います。ありのままの自分が安心して表現できる場所は、今の社会では作りづらいことなのかもしれません。でも、だからこそ人々はそういう場を求めているのだらうと思います。

日	程	【展示】7/17～25 ※20日休 【関連企画】①エイブル・アート勉強会7/22、②みんなのオープン・アトリエ7/25
会	場	【展示】ala 美術ロフト 【関連企画】①オンライン、②ala 音楽ロフト
集	客	【展示】502人 【関連企画】①10人、②7人
出	展	宇仁英宏(アトリエ・ウーフ/京都)、吉川明広(アートセンター画楽/高知)、福島由輝也(栃木)、大久保潤(メブルカレん/神奈川)、
展	者	澤井玲衣子(たんぼの家アートセンター-HANA/奈良)、福岡佐知子(たんぼの家HANA/奈良)
企画・協力		一般財団法人たんぼの家、社会福祉法人わたぼうしの会
協力		公益財団法人岐阜県教育文化財団 TASCぎふ
共同主催		可児市

アール・キネマ倶楽部(福祉施設無料上映会)

コロナ禍での、障がい者支援施設を対象とした無料上映会を実施。

施設の方の声から生まれた福祉施設無料上映会

障がい者支援施設の方から、「感染リスクが高いので、障がいのある方の外出が非常に困難になっている」との声が。それでは、「普段一緒に活動している仲間たちと同じ空間へ出かけるなら、感染リスクが低いのでは」と、アールが子ども達を対象に開催している「無料アニメ上映会」を拡大し、主に障がい者支援施設の方が施設ごとにシアターを貸切り、映画を楽しんでいただく無料上映会を開催しました。

映画館は、障がいのある方にとっては音量や明るさなど、鑑賞ハードルが高い面もあります。今回は、それぞれのご希望に

合わせた鑑賞環境(場内を明るめにする・音量を下げる・途中休憩を入れる等)を提供し、中にはご家族で来てくださる方など普段一緒に過ごしている人たちとゆっくり映画を楽しんでいただけたようでした。施設の方からは、早速来年度の問い合わせもあり、この取り組みが求められていることも実感しました。

社会にとって、あらゆる人が楽しめる選択肢を増やしていくことは、普段からとても重要なことです。今回は感染症リスク軽減のため施設ごとの貸切上映としましたが、コロナ禍が明けた際は、あらゆる人が共に楽しめる「フレンドリー上映会」に移行するなど共に鑑賞できる機会を検討していきたいと思います。

日	程	7/21～3/31(計15回)
会	場	ala 映像シアター
集	客	228人

みんなのディスコ 2021

障がいあるなし関係なく、誰もが全身で音楽を楽しむ！



オンラインならではの双方向性を最大限に活かして開催

今年度は感染対策の面から2つの福祉施設とオンラインで繋いでの開催となりました。市民ボランティアの皆さんが描いてくださった「みんなのディスコ」のにぎやかな看板をバックに、「ハロウィン仮装ファッションショー」を主軸とした、視覚的にも楽しいディスコになりました。「うたのギリギリおにいさん」こと川名洋行さんのMCにより、画面の向こう側にいる皆さんをディスコの世界に引き込んでいきます。事前に施設職員の方からヒアリングしていた参加者それぞれのキャッチコピーや自慢のコスチュームの見どころを読み上げ、ひとりずつ画面の前に登場していただきました。声が出しづらい状況なので、事前に配布していた「いいね!」と書かれた“応援うちわ”を使って、互いの登場シーンを盛り上げます。DJタイムには音楽に合わせて自由に体を動かしたり、ショータイムではMCが歌うバラードにうっとりしたり、双方向に対話をしながら、全身で音楽を楽しみました。福祉施設の方からは、車いすや体調などの理由で普段からオンライン開催を希望されていることも分かり、今後も状況に合わせた柔軟な対応をしながら、あらゆる人が共に楽しめる「みんなのディスコ」を開催していきたいと思います。

日	程	10/31
会	場	ala 演劇ロフト、オンライン
集	客	37人
参	加	可茂学園、愛の家グループホーム 可児広見
出	演	MC:うたのギリギリおにいさん(川名洋行) DJ:AKIRA / KZY / KYORO
協	力	市民ボランティア

アーラ映画祭 2021

映画館が無い可児での、市民実行委員による、多様な人が鑑賞できる機会と環境づくり



▲「三島由紀夫vs東大全共闘」豊島監督(右)



▲「あのこは貴族」組手監督(右)

映画を通した人の繋がりを支え、広げる。

映画を愛する市民有志が運営する「アーラ映画祭」は、今回で15回目の開催です。2021年度は毎月2回のミーティングを重ねて厳選した日本映画8作品を、5日間に渡って上映しました。

映画祭実行委員が担うのは作品選定のほか、チラシや当日パンフレットに載せる推薦文の執筆、館内に掲示する広報物の作成、また、映画祭当日の受付や上映前の前説などです。今回はゲストとして「三島由紀夫vs東大全共闘〜50年目の真実〜」の豊島圭介監督と、「あのこは貴族」の組手由貴子監督をお招きし、司会進行も実行委員のメンバーが務めました。昨年度は新型コロナウイルスの影響で実施出来なかったゲストを招いての双方向のやりとりが2年ぶりに復活し、映画を観る、そして映画をきっかけに他者と語り合い、新しい視点に気づき合う…まさに映画の醍醐味を味わう貴重なひとときとなりました。

上映作品は上記2作品のほか、「スパイの妻(劇場版)」「もみの家」「花束みたいな恋をした」「ステップ」「今日も嫌がらせ弁当」「天外者」。そのうち4作品はバリアフリー日本語字幕付き上映を行い、ゲストトークでは要約筆記の方々にもご協力いただきました。昨年度は3作品の上映のみに留まり、今年度もミーティングが始まった頃は緊急事態宣言などで急遽オンラインでの話し合いになるなど、思うように活動できない日々が続いていましたが、こうして無事に開催できたことは大きな喜びでした。お客様からのアンケートでは、「トークショーをいつも楽しみにしています。映画が2倍面白くなります。」「映画館が近くにない者にとっては、身近に映画に触れる機会を持てることが大変ありがたく感じております。」「観たい映画が目白押しで、すべて観たいです。」などと声をいただき、映画館がない可児市においてこの映画祭が大切な場であることを改めて実感させられました。中には、「映画祭実行委員に参加したい」という声もいただき、来年度に向けて新たなメンバーを迎えながら、今後も、映画をきっかけに人々が繋がる場所として、実行委員一同、楽しみながら活動を広げていきたいと思います。

日	程	11/4～11/8(計14回)
会	場	ala 映像シアター
集	客	486人
出	演	トークショーゲスト:豊島圭介(映画監督)、組手由貴子(映画監督)
協	力	アーラ映画祭実行委員会

ROCK FILL JAM in ala みんなでつくるデザインマスク展

2組のプロミュージシャンによるライブ「ROCK FILL JAM in ala 特別編」と一般公募したデザインマスクを展示する「みんなのデザインマスク展」を開催。



ROCK FILL JAM in ala 特別編

「RFJ in ala 特別編」公演の小劇場舞台には、舞台美術として、やぐらが組み立てられました。赤白のリボンを交互に巻いて装飾をしたり、布の継ぎ目が目立たないように手直しを行ったりと、RFJの細やかな工夫がされた立派なやぐらは圧巻でした。感染症対策として入場者数を50%とした分、客席がさみしくならないよう空席にベニヤ板で作成したオブジェを飾り、カラフルに彩られた観客席と舞台のやぐらと相まって会場はお祭りの形相でした。ライブ公演は、「鈴木実貴子ズ」と「向井秀徳」の2マンライブで、テクニカルなギター裁き、圧倒的な歌唱力にズシンと体の芯に響くドラムの音で、会場は大盛り上がり。それでも、コロナということもお客様はご理解くださっているの、心の高まりを声には決して出さず、ライブを楽しんでいただきました。公演はRFJ初のネット動画配信+アーカイブ配信も行い、どこにいても音楽を楽しめる現代の生活スタイルに寄り添った音楽提供にも挑戦しました。

みんなでつくるデザインマスク展

マスク展は市民に広く応募を呼びかけ、マスクのデザインを募りました。応募数139作品の中から、グランプリの他、多様な賞を設けました。入賞作品は人型に模したパネルでの展示、彫像に着衣させるなど工夫を凝らした展示とし、また入りやすい空間作りの創出のためのポップ展示、アンケート入れにロボットを模したボックスの設置など、随所に遊び心が見られた展示となりました。

日	程	RFJ in ala 特別編:3/19 みんなでつくるデザインマスク展:1/12～19、1/26～31(計14日間)
会	場	RFJ in ala 特別編:ala 小劇場 デザインマスク展:ala ギャラリー
集	客	RFJ in ala 特別編:113人 デザインマスク展:65人
主	催	RFJ制作委員会
後	援	可児市教育委員会、NPO法人可児市NPO協会

平田オリザの「対話を考える」モデル授業

Project 18

劇作家・演出家で、教育・文芸・言語などあらゆる分野で活躍する平田オリザ氏を講師に迎え、市内小中学校の4年目・5年目の教員を対象とした演劇手法を活用したコミュニケーションワークショップ講座を講義形式で実施。



日	程	7/29
会	場	ala レセプションホール
参	加	28人
講	師	平田オリザ(劇作家・演出家)

ココロとカラダの健康ひろば

PROJECT 19

60代以上を対象としたコミュニケーション・ワークショップ。継続的な参加によって、楽しみながら健康維持と新たなコミュニティづくり。



前期は岐阜県のまん延防止等重点措置により5月以降の対面ワークショップが中止となり代替企画としてzoom交流会を2回実施。

日	程	4/21～12/15(計14回 内2回ZOOM交流会)
会	場	ala レセプションホール、オンライン
参	加	延べ149人
講	師	新井英夫(体奏家・ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
アシスタント		板坂記代子、松岡恭子

劇場フロントスタッフ養成講座

PROJECT 20

NPO法人alaクルーズ連携による劇場でお客様をおもてなしするフロントスタッフの基礎知識を学べる、初心者向け養成講座と経験者フォローアップ講座。



岐阜県のまん延防止等重点措置の延長に伴い、当初予定から延期し開催。

日	程	座学編7/4 実技編7/22 フォローアップ研修8/21(計3回)
会	場	ala 主劇場 ほか
参	加	延べ52人
講	師	星乃もと子(Theatre Management Plan Co.,Ltd.代表)
協力		NPO法人alaクルーズ

ala みんなの同窓会

Project 21

2008年度から毎年実施している市民参加型事業の参加者を一堂に集め、参加者同士の交流を深める。

感染症対策を鑑みオンライン開催。
ネガティブになってしまいそうな状況下でも、アーラに関わる方々が少しでもポジティブに乗り越えようとしている姿に、互いが励まされました。



日	程	9/4
会	場	オンライン
参	加	26人

歌舞伎とおしゃべりの会

PROJECT 22

知識の有無にかかわらず、誰もが楽しめる気軽な歌舞伎講座。

10/2	「高麗屋の芸を磨く 松本幸四郎 + 葛西聖司」 講師:松本幸四郎(歌舞伎役者)、葛西聖司(古典芸能解説者) 会場:ala 主劇場 集客数:227人
12/12	「いまこそ発見!シネマ歌舞伎の魅力と制作裏話」 講師:高橋久則(映像監修者)、葛西聖司(古典芸能解説者) 会場:ala 映像シアター 集客数:44人
12/25	「中村橋吾のひとり歌舞伎④「修禅寺物語」を楽しむ」 講師:中村橋吾(歌舞伎役者) 会場:ala 演劇ロフト 集客数:66人
2/12-13	「木ノ下先生とディーブに学ぶ歌舞伎冬期講習」 講師:木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎主宰) 会場:ala 映像シアター 集客数:36人
2/23	「播磨屋の教えを守る～歌舞伎役者・中村歌昇への期待～」 講師:中村歌昇(歌舞伎役者)、葛西聖司(古典芸能解説者) 会場:ala 小劇場 集客数:76人
3/13	「ディーブに歌舞伎入門⑤『熊谷陣屋』を読み解く」 講師:木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎主宰) 会場:ala 映像シアター 集客数:37人

東日本大震災復興支援 祈りのコンサート

PROJECT 23

東日本大震災被災地の復興への応援として“アーラとしてできることは何か”を考え、震災の記憶を風化させないよう、多くの犠牲になられた方々の鎮魂と、被災者の1日も早い心の復興を祈るコンサート。

お客様からの募金 73,888円
公演の収益 20,964円
寄託金合計 94,852円
【寄託先】
公益社団法人宮城県精神保健福祉協会 みやぎ心のケアセンター
傾聴ボランティア「こころのもり」 宮古地域傾聴ボランティア「支え愛」
気仙地域傾聴ボランティア「こもれびの会」



日	程	3/12
会	場	ala 主劇場
参	加	280人
講	師	ヴィオラ:安保健麻 ピアノ:三輪 郁 ナビゲーター:佐野秀典(作曲・編曲家)
協	賛	株式会社カラビナ、株式会社松栄堂楽器 可見店、株式会社トイ・ファーム、株式会社ワンズ・プランニング、岐阜県舞台設備管理事業協同組合、じゃぱんSANDWICH、ハーモニーワークス、ホテルルートイン可児、丸理印刷株式会社(敬称略・順不同)

開館20周年となる2022年度の新たな取り組み

文化芸術を活かした“つながりの処方箋”で、
誰も取りこぼさない地域社会をつくりたい



ala まち元気 そうだん室

劇場は、私が私で居られる場所

芸術は、私と地域をつなぐ扉

ala まち元気そうだん室 はこんな場所です。

いろんな舞台公演やどれもが
参加できるプログラムのこと、
中・高生の体験活動である
「alaまち元気部」などの
面白さや魅力を聞いたり
自分たちの活動についての
アドバイスももらえたりするよ。

アーラの館長や
スタッフ、
地域のいろんな人たちと
楽しく雑談できるよ。

同じ趣味を持つ人たちや、
カラダやココロに悩みを持つ人たちが集まって、
お互いに話を聞きあったり
相談に乗ってあげたりできる
交流の場所にしていきたいよ。

素敵な本の読書会をしたり、
アールで観た公演の感想を語りあったり、
キズクリのパーズカードづくりや
小さなアート作品づくりも体験できるよ。

そうだん室の開催日や
イベント情報はこちら！



劇場(新しい広場)
alaまち元気部の
活動



学校
教育委員会・各種学校
不登校対策



アーティスト
文化芸術プログラム
アウトリーチ
活動

つながりの
処方箋



行政、社会機関
高齢者・多文化共生・
子育て・障がい者の
支援



地域住民
alaまち元気サポーターズ
NPO活動



地元企業
私のあしなが
おじさん

ala まち元気そうだん室 は
地域のさまざまな機関や
活動とつながっています。

劇場の“アート体験”と 多世代の“ライフステージ”をつないで、 地域を元気にする笑顔の劇場へ。

みなさんは日々、いまだ終わりの見えないコロナ禍で生きづらさや孤立感を感じていませんか。あるいはその日常にも慣れ、マスクをはめたまま一日を過ごし、お互いに表情を見せあうことも、あいさつを交わすことも少なくなっているいませんか。開館20周年を迎えた“可児市文化創造センターala”では、今こそ文化芸術の持つ効能で少しでも地域を元気にするため、今日までアールのプログラムを通じてふれあい、親しみ、そこから生まれてきたたくさんの つながりを、世代を超えた地域全体の 交え合い のプラットフォームに発展させたいと願っています。“alaまち元気そうだん室”は、誰もがつながれるアットホームな居場所 です。そして、アールを愛するみなさんや地域のソーシャルワーカー、アーティスト、地元企業の支援者とともに、子どもから大人まで世代に関係なく、多様な価値観や新しい自分に出会える場所 にしていきたいです。良かったらアールに遊びにきてください。いろいろなお話をしましょう。

おいしいお茶と
新しい仲間が待っています。



ala まち元気そうだん室 の 活動を支えるサポーターも募集しています！

「alaまち元気そうだん室」の運営サポートのほか、さまざまな市民参加プログラムや中・高生の体験活動「alaまち元気部」などを自分自身も楽しみながら支援して下さる「alaまち元気サポーターズ(登録制)」の登録者を募集しています。

エントリー
フォームは
こちら



alaまち元気
そうだん室





KANI PUBLIC ARTS CENTER ala
MACHI GENKI PROJECT



アールまち元気部

令和4年度文化庁「地域文化倶楽部（仮称）」創設支援事業



中高生の皆さん、^{アール}alaが ^{コミュニティ}地域活動×^{カルチャー & アート}文化芸術を 組み合わせた部活動 はじめます！

学校の中での部活動とは一味も二味も違うアールと地域と中高生が一緒に考える“新しい部活動”のカタチ、『アールまち元気部』。中高生が地域に住むさまざまな世代の人たちと、アールの文化芸術プログラムを通じてふれあい、親しみ、そこから生まれたつながりを地域や劇場、学校の取り組みに活かしながら、“まちを元気”にしていくユニークな部活動にしていきたいと思います。



alaまち元気部



“私たちのまち”が
もっと元気になるために、
一緒に考えませんか？

アールは地域の課題に対して、
様々な団体・機関・専門分野の方々と結びつきを強め、
共に解決のアプローチを模索していきたいと思っています。
こうした活動に関心のある方はお気軽にご連絡ください。

ala まち元気そうなん室
Tel:0574-60-3311 Email: alamachigenki@gmail.com

「alaまち元気プロジェクト」
レポートを下記のサイトに掲載！



チェック!!

<https://www.kpac.or.jp/ala/town>

alaまち元気プロジェクト

★ パートナーグッズ ★



シリコンバンド
500円(税込)



ピンバッチ
500円(税込)



マグカップ
700円(税込)



※2枚1組
クリアファイル
100円(税込)

賛同の気持ちとして購入いただき身に着けることで応援していただいています。